

心に息づく東郷町との絆

復興庁事務次官の天河宏文（あまかわひろふみ）です。私は昭和41年に名古屋市で生まれ、西区、昭和区に住んだ後に父親の転勤に伴って兵庫県西宮市にも転居し、そこで小学校を卒業しました。東郷町和合ケ丘には、昭和55年1月～昭和60年3月まで暮らしました。わずか5年ほどなのですが、中学、高校と一番多感な時期を東郷町で暮らし、今でも本籍を東郷町に置くなど、これまでの60年の人生で15カ所ほどを転居してきましたが、一番思い入れがある、懐かしい地となっています。

平成2年に大学を卒業し、当時の建設省に入省しました。バブルの名残が色濃い時代で、東郷町でもそうだったと思いますが、土地や住宅価格が急騰して、普通のサラリーマンでは家が買えない時期でした。そうした住宅・土地問題や都市開発に興味があって建設省を志望したのですが、三十年以上を経過した今では、むしろ、空き家の急増などが問題となっており、この間の社会・経済情勢の大きな変化を感じます。

福島の確かな復興に向けて日々尽力

本年8月に復興庁事務次官に就任しました。復興庁は東日本大震災からの復興を担う役所です。15年前の大震災は大きな被害を東北地方にもたらしましたが、おかげさまで岩手、宮城では公共施設の整備も一段落しました。しかし、福島の原子力災害被災地の復興は、まさにこれからという局面であり、現在は、福島の復興に国を挙げて取り組んでいるところです。



私と東郷町

私が暮らしていたのは40年以上前なので、随分、東郷町も変わったと思います。町長や役場職員が時々訪れてくれて、町の発展の様子を教えてもらっています。昭和55年といえば豊田新線が開通したばかりであり、田畑や森林の残る、のどかな地域だったという思い出があります。歩いていると、キジをよく見かけました。今では、なかなか難しいかもしれませんね。